



# 仏教マンガ・仏さまのおしえ



絵：小川ゆきえ (252)



コレさえあれば！  
大丈夫??



「知ってる？ 仏事のあれこれ」

# 「お墓」におもっくんと



「墓じまい」って必要なの!?」

大阪市 願光寺 茨田 通俊

「墓じまい」という言葉を聞くようになって久しいです。流行りの終活の一環として、お墓の処分が半ば必然のこととして扱われているようです。子孫に維持管理で余計な負担をかけたくないという思いも背景にあるのでしょう。遠方で暮らしていてなかなかお参りできない等、実際には様々な事情があるのだと思います。私のお寺でもご門徒から墓じまいの相談を受けることがあります。長

年大事にして来たお墓をなくすことに対して、誰しも複雑な思いを隠せないようです。

「〇〇家の墓」や「先祖代々の墓」と刻まれた墓石をよく見かけます。亡くなった方々のご縁のあった者が、彼らを案じて供養するという形が表れているのでしょうか。今日の墓じまいの傾向は、実はこうした先祖供養の考え方と無関係ではないと思います。確かに先祖を大事にしたいという気

持ちは多くの人にあるのでしょうか。けれどもそこでは、今を生きている私自身が逆に先祖から問われているという視座が見失われているような気がします。

「〇〇家の墓」とするならば、その家系に関係する者の遺骨が納まった場所を意味する、単なる墓標でしかありません。そうした捉え方だと、配偶者の親と同じ墓に入りたくない、といった個々の事情が露わになります。それに対して真宗では、墓石に南無阿弥陀仏と刻むのが本来のあり方です。また「俱会一処」と記す場合もあります。『仏説阿弥陀経』にある言葉で、共に一つの場所（浄土）で出会うことを表します。

南無阿弥陀仏は、すべての人が阿弥陀仏の名を称えることで等しく救われることを願いとします。このお名号に込められた世界、血縁や親疎を超えて、誰にでも開かれた阿弥陀仏の浄土に共に生まれることが願われているのです。

お墓の前で手を合わせる時、仏となった亡き人が、様々なしがらみを超えて共なる世界に目覚めよと呼びかけて下さっているのです。先立って命を終えていかれた方々をご縁として、私にかかられた真実の願いを確かめる、そのような大切な場所がなくなってしまうとすれば、それはとても残念なことではないでしょうか。

今月のことば

仏慧功徳をほめしめて

十方の有縁にきかしめん

信心すでにえんひとは

つねに仏恩報ずべし

という譬えを紹介したいと思ひます。

この譬えは、『あなたの前にあるグラスには水が半分入っています。この水を「まだ半分

のです。

次に「仏恩」とは、自分の都合を通してでしか物事を受けとめられない私に、事実を頷き、真実に目覚めてほしいと常に呼びかけ、願ってくださいている阿弥陀仏のご恩のことであると思ひます。

さいと言われるのでしよう。

私たちは、グラスの中の水と同じように、ありのままの事実を忘れて、自分の都合で物事に対する認識を歪めてしまひます。しかし、そんな私へ阿弥陀仏からの呼びかけが、常に向けられていた事実気づかされ、都合の良いことも悪いこともそのまま素直に受け止め、願ひて生きてゆける。その眼と依り処を賜ったご恩に報い、お念仏をさせていただく生活を送ることが「仏恩に報ずる」ということなのだと思います。

(辻岡 和貴)

このご和讃をいただくにあたり、「仏慧」と「仏恩」の2つの言葉を中心に考えていきたいと思ひます。まず、「仏慧」ですが、これは「仏の智慧」つまり「物事をありのままに受け止める眼」のことで、その眼を賜ふことを「仏慧功徳」と表現されているのだと思ひます。「物事をありのままに受け止める眼」について考えるのに「グラスの中に水が半分入っている」(glass half full/empty)

もある(ポジティブな受け取り)か「もう半分しかない(ネガティブな受け取り)」と受け取るか、あなたはどちらですか?』という考え方を表すものですが、事実としては「水はグラスの中にある分」だけで変わりません。私たちは状況によって、自分の都合のいいように事実を受け取ろうとしてしまひますが、たとえそれが自分にとってどれだけ都合が悪くとも事実は決して変わることはない

『蓮如上人御一代記聞書』に「私の心は、まるで籠に水を入れるようなもので、仏法を聞いているその場では、ありがたく尊いものだと思うのですが、すぐに元の心に戻ってしまうのです。」という人に対し、蓮如上人は「そのかごを水につけよ」と言われまひました。不安定な自分の心を頼りとせず、どんな場合でも仏法を拠り処として、その教えに満たされた生活を生きな

今月のことば出典『浄土和讃』

『真宗聖典』(初版) 483頁

(第二版) 577頁

『増補 真宗大谷派 勤行集』

(青本) 127頁

# 私たちの強さは

# 弱さから生まれる

ラルフ・ワルド・エマーソン

『2026年難波別院カレンダー』7月のことば

## 掲示板のことば

去年の大阪万博で、パビリオン予約を行う機械の順番待ちに並んでいた時、初来場で何もわからないという老夫婦が私の前にいました。

炎天下でその場にいる全員が汗だくで体力が奪われていく中、老夫婦の近くにいた女性が「初めてですか？」と声をかけ、機械の操作方法などを丁寧に説明してあげていました。

その女性は何度も通っているらしく、初めてのことで戸惑う気持ちも、暑い中動く辛さもよく知っているからこそ、老夫婦に優しく接することができますのだらうと思います。

その様子を何気なく見

ていましたが、「私にも何かできたのでは…」という思いが後から湧いてきました。そして自分自身のことだけではなく、他者のために「一歩踏み出せるきっかけは何だろう」と、少し立ち止まって考えてみるのが、実はとても大切なことなのではないかと思うようになりました。

私は、老夫婦がその時感じていたであろう戸惑う気持ちを知りながらも、自分自身の余裕の無さからなんとなく見過ごしていた自分の姿に気がつかれました。そういう心と向き合うことこそが、「次は声をかけてみよう」と一歩踏み出す強い原動力となっていくことを老夫婦とその女性から教えていただいたように思います。

(大阪教区教化センター)